
なぎなぎさん

まりもずく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なぎなぎさん

【Nコード】

N6217V

【作者名】

まりもずく

【あらすじ】

チートなようでチートじゃない、弱くて、ズルくて、臆病な過負荷主人公、津奈木^{つなぎなまき}榊がめだかボックスの世界をうろろろする話。

駄文&不定期更新でバリバリの処女作ですがよろしくお願いします。

『せってい』（前書き）

完全自己満足な設定です。

私は単行本派なので設定が被ってる新キャラが出たら教えてくれると嬉しいです。

『せつてい』

名前 ツナキナキ 津奈木 栴
一年一組所属 AB型
性別 女

過負荷その一 デリートオフデリート 零式消去

自分の周りにいる者の能力を全て無効化する。
そこに過負荷も異常も特例も悪平等も関係ない。
だが自分の持つ能力は無効化できない。
on、offは一応つけられるが身の危険を感じたり、緊張したり
すると強制的にonになる。
また、off状態であっても栴に対して能力を使えば無効化される。

3

過負荷その二 バットコミュニケーション 私と私の世界

自分を認識した者の自分への印象を改ざん及び修正することができ
る。
だが自分の印象を特別良くすることはできず、せいぜい普通と認識
させるぐらい。
過負荷の能力を持つ者には効果が無い。
また直接的に触れたことのある者には干渉でき、
少しなら状態を操作することができが
疲れるしめんどくさいのであまり使わない。(過負荷にも効果あり)

見た目

少し緑がかった黒髪をサイドテールにしている。(胸くらいまである)

顔は整っているが目が濁っている。身長は球磨川と同じくらい。

性格

色んな面で適当、めんどくさがりや、一つの信念や思考に捕らわれずどちらか一方につくとかはない。逆に言えば決まった信念や思考がない。

仲間意識もない。

感情というものを全く表さない、また感情に左右されない。(でも作り笑いをする)

過負荷に加担するわけでもなく、異常を敵視することもない。

4

補足

過負荷には同類と認識されているがその他には普通な存在として認識されている。

基本的に話さないが会話ぐらいは普通にする。

口癖は「めんどくさい」「わかりませんけど」

そんな感じ

『せつてい』（後書き）

デリートオンデリート

零式消去は悪平等の能力も無効化するので

安心院さんの能力も全て効かないチートです。

でも所詮過負荷はマイナスにしか働きません、過負荷だもの。

こんな駄作でも良かったら続きを読んでやって下さい。

『ぶろろーぐ』（前書き）

今回話が皆無です。

文に矛盾とか誤字とかあったら報告してくれると嬉しいです。

『ぶろろーぐ』

津奈木栂は不完全だった。

もともと両親が栂を過負荷だと認識することはなかった。

至って普通な両親のもと生まれた栂はそれなりに生まれたことを喜ばれ、
それなりに愛情を注がれ、他人から見ればそれなりに幸せに育てられた。

だが栂自身はそうではなかった、その不完全さ故か悟ってしまっていたのだ。

7

自分が過負荷であることに。

それは生まれたときか、あるいはこの世に生を受けたときか、
栂は絶望していた。

自分は普通のように恋愛感情を抱けないことに

自分は普通のように親子関係を築けないことに
自分は普通のように友情を育めないことに
自分は普通のように生きられないことに

榊は気付いていたのだ、周りの自分への認識が自分の欠点によって
変えられていて、
その認識が本来の自分と違っているということに。

だがその過負荷さに気付いていてなお、榊はその欠点に縋るしかなかった。

自分が過負荷だということが周りに認識されれば榊は嫌悪され、
気持悪がられ、
敵に回されるだろう。

榊はいつもそんな感情に怯え、逃げていた。

不幸なことに榊にはもう一つ欠点があった、それが本来持っていた
欠点なのかは
定かでは無いがこれも榊の欠点によってかろうじて隠すことができた。

けれどそれは結局欠点を欠点で隠すだけであり、実質なんの解決にもならない。

だから逃げた、「普通に生きたい」と思う自分からも逃げた。逃げている事が正しい選択なのかわからなくてそれからも逃げた。でも枷には逃げられないものがあった。

「同類」《マイナス》だった。

枷と同じ過負荷の能力を持つ者達だった。

つまり「同類」《マイナス》には枷が「同類」《マイナス》の人間だと

認識させることしか出来なかったのである。

だから枷は逃げる事をやめた。だが受け止めることもしなかった。

枷は全てを放棄した。

逃げることも、受け止めることも、信念や目標を持つことも自分を縛ることも、感情に左右されることも、

全てを放棄し、枷は生きている。

『ぶろろーぐ』（後書き）

自分で書いといてなんですけど・・・

意味分かんないところ多いと思います。

もっと分かり易く書けるようになりたいです。

次回は人吉先生に診察されます。

『ひとよしせんせい』（前書き）

人吉先生が榊を診察します。

場所は箱庭総合病院ですが、人吉先生以外のキャラには遭遇しません。

あいかわらず駄文なので何かアドバイスなどしてくれると嬉しいです。

『ひとよしせんせい』

津奈木栴は病院にいた。

もともと体は弱い方だったが別に風邪を引いたりしたわけではなかった。

両親は怪訝に思っていたが、いつも至って「普通」な栴が自分から「どこかに行きたい」と言ったのは初めてだったので、娘の頼みを聞いてこの病院にやってきた、それだけだった。

病院内に入った栴は不思議そうにしている両親の自分への印象をいつものように

「普通な子供」という認識に修正してから入口付近で待つよう言い聞かせ奥へと進んだ。

看護師さんに診察してもらえるよう嘘の事情を話すと思いのほかあっさり

名札を渡され待合室で待つよう言われた。

なんでも子供だけ置き去りにして逃げるように帰る親が多いらしい。

保護者無しに未成年を診察している所を見ると何かの組織の手が回っているのかもしれない。

そんなことを考えていると申請した時間が早かったのか意外と早く検査室に呼ばれた。

そこには小学生のようにしか見えない少女？が座ってカルテを読んでいた。

「えっと、あなたが津奈木栂ちゃんね？」

「はい、こんにちは。」

「うん、こんにちは！」

「私がかみを担当することになった人吉瞳！よろしくね！」

はにかむ人吉先生に対して栂は無表情だった。

「・・・人吉先生、私、ひとつ聞きたいことがあるんです。」

「うん、いいけど、何かな？」

栂は少し考えると、すぐさま質問した。

「じゃあ単刀直入に言います。人吉先生は私にどんな【第一印象】を抱きましたか？」

「!？」

人吉瞳は驚いた、質問こそ普通なもの、それこそが榊と出会って初めて感じた異常性だったからだ、いままで何人もの異常を持った子供達を診察してきたが

榊の第一印象はまるで榊に対する「印象」の認識がすり替えられているかのよう

【普通過ぎる】

人吉瞳は努めて冷静を装い質問に答えた。

「うーん、第一印象は普通かなー、でも詳しいことは調べて診ないと分からないよ？」

それを聞くと榊は小さく微笑んだ、が、その笑顔は極めて露骨な作り笑いだった。

「そうですね、ありがとうございます。」

それだけ言うと榊はまた無表情に戻った。

その後も検査は続けられたが榊に印象の違和感以外の異常性は見られず。

基準に基づき入院も通院も無し、カルテには異常無しと書き込まれた。

だが納得できない人吉瞳は印象の違和感のことだけでも両親に伝えようとカルテに書き足した。

榊は両親に見せるように人吉先生に言われて貰ったカルテを途中で処分し、入口で待つ両親の元へ向かった。

『ひとよしせんせい』（後書き）

榊が病院に行きたいと言ったのは榊が「一度病院で診てもらった方がいいのかなー」と思ったからです。

人吉先生が榊の過負荷に気付けなかったの榊が印象をギリギリまで高く

認識させ続けたからです。

次回はいよいよ学園編スタートだと思えます。

『しらぬいはんそで』（前書き）

今回のめだかちゃんの出番はお馴染みのセリフを言うだけだったり。ほとんどは不知火ちゃんとの関係について、榊はめんどくさがりやだけど割と面白いことが好きなので、不知火と一緒に善吉を見物したりします。

感想など書いてもらえると嬉しいです。

『しらぬいはんぞで』

「世界は平凡か？未来は退屈か？現実には適当か？安心しろ　それでも生きることは劇的だ！」

「ふーん」

「そんなわけで本日よりこの私が貴様達の生徒会長だ、学業・恋愛・家庭・労働

私生活に至るまで　悩みごとがあれば迷わず目安箱に投書するがよい」

「・・・」

「24時間365日私は誰からの相談でも受け付ける！！」

「頑張るなー」

生徒会長黒神めだかの演説を聞きながら、一年一組津奈木栂は退屈だからブツブツと独り言を言ったり言わなかったりしていた。

教室に帰るとやはり当然のように生徒会長の話題で持ちきりだった。これと違って興味の無い栂は頬杖をつきながら会話を聞き流していた。

するとクラスメイトの一人、人吉善吉が立ち上がり、

「俺は絶対！生徒会には入らない！！」

と、高らかに宣言するやいなや、ガシツと黒神めだかに頭を掴まれ連れて行かれてしまった。

それを横目で見ていた榊は何の表情も浮かべず、ただひたすらに二人を無機質な視線で見送った。

それから少しすると、ただ座っていることに飽きた榊は友人 不知火半袖のもとに向かった。

不知火半袖と津奈木榊の出会いには極めて普通なものだった。

二人は同じクラスの生徒であり、榊は自身の欠点によりクラスの間、「普通」として認識されていた。

ただ一人を除いて。

それが不知火だった、榊は不知火を紛れもない「同類」だと認識し、不知火もまた同じだった。

それだけ

自然にお互いが同類だと認識したものの、榊にとっては同類だけで特に意識することはなかった。

だが不知火の方は興味を持ったのか榊に積極的に話し掛けてきて、榊も拒む理由もなかったので普通に会話し、そのまま友達になった。そんな至って普通な出会いだった。

お互い過負荷であること以外は

ばきゅばきゅと効果音を出しながら不知火半袖は振り向いた。

「あ 津奈木、どーしたの？」

「ねえ不知火、暇で死にそうなんだー、なんかめんどくさくなくて面白いことないかな？」

「あひゃひゃ 皆こぞってあのお嬢様のこと話してるのに相変わらずのんきだねえ」

「あの生徒会長さんのこと？別に興味ないなー、不知火はどうなの？」

「あたし？あたしはあの女は嫌いだよ、でも人吉は親友だからあい

つが生徒会に入れば仕事は手伝うかもしんないね!」

「ふーん、不知火がそう言うんだったら私も手伝おうかな、っていうより見物に近いかな？」

めんどくさいけど退屈で死にそうだし」

「うん あたしもどっちかってゆーと人吉が酷い目に遭うのが見ただけだし、一緒に見物といこうよ!」

「・・・不知火はホント人吉くんが好きだね」

「津奈木もあいつと友達になればいいじゃん?」

にやにやとしている不知火に榊は淡々と告げた。

「そうだね、でも私みたいな人間と仲良くなってくれるかな?」

「あいつは意外と心の広い奴だから大丈夫だと思うよ?」

「.....」

「まあ、肝心の人吉くんが生徒会長さんに連れていかれちゃったし、今日はなんか甘い物でも食べて帰ろうよ」

「じゃあ早く行こーよー!」

その後不知火と榊は箱庭学園周辺のお店のスイーツを（主に不知火が）食べ尽くし、帰宅した。

『しらぬいはんそで』（後書き）

榊はいつも適当です。

会話してても適当な思考で話してはいますがそれが奇跡的に普通な受け答えなだけです。一言で言うと「一周回って普通」です。意味分かりませんね。

フラスコ計画が始まるまでほのぼのだったりします。

『ひとよしぜんきち』（前書き）

風紀委員会編あたりから枷はゼロアウト零式消去を
使ったりしますがそれまではとっってもほのぼのな感じで進みます。

今回は少し短いです。

『ひとよしぜんきち』

津奈木栂は自分よりも数倍重い体をした男子生徒を保健室まで運ぼうとしていた。

「重いな・・・」

気絶している男子生徒をなんとか持ち上げゆっくりと歩く、でも重過ぎて保健室まで運ぶ前に押し潰されてしまいそうだ。

そもそもなぜこんな状況に陥ったのか？

津奈木栂は今日もやることがなかった。

家に帰ってもやることがないのは同じなので帰らなかった。

なのでただ校舎内をぶらぶらと適当に歩き回っていた。

そこで偶然に頭から血を流して倒れている男子生徒を発見した。

男子生徒は血だらけだったが榊は別に驚いたり動揺することはなかった。

放って置こうかとも思ったが、なんとなく保健室に運ぶことにした。

そして現在に至る

保健室の場所を適当に思い出した榊はふらふらしながらもゆるゆると進み、

やっとのことで男子生徒を保健室まで運び、ベットに寝かせた。

保健室は無人だったが扉にはすぐに戻ってくる趣の置手紙が貼られていたので、

榊は応急処置をして保健医が戻ってくるのを待つことにした、どうせやることないから。

慣れない重労働をしたせいで体の節々が痛む、それに予想外に重かったこともあり、

榊は押し寄せる疲労感で眠ってしまい、目が覚めた頃には男子生徒は居なくなっていた。

「……不知火のどこにも行こーっと」

榊は完全に夢だと思っていた。

その頃、人吉善吉は剣道場に居た。

稽古に励んでいた剣道部員？達をボコボコにし、人吉を保健室送りにした張本人。

日向を同じくらいボコボコにした後、人吉はまだ少し後頭部に痛みを覚えながらも、自分を保健室まで運んでくれた人物について思考していた。

人吉は気絶している自分を保健室まで運び、手当をしてくれたのは同じクラスの女子だと確信していた。

名前は確か津奈木榊、
彼女だと思ふのには理由があった。

それは人吉が保健室で目覚めたとき、榊は人吉に寄り掛かって眠っていて、その制服には人吉の額を伝い落ちたのであろう血が少量だけが付着していた。
という極めて単純かつ明快な理由だった。

一言お礼を言いたかったが当の本人も眠っていて、人吉も一刻も早く剣道場に向かいたかったので、剣道場に向かうことを優先した。

「・・・今度ちゃんと礼を言っとかねーとな」

対して榊は

「なんで不知火が役員募集会に出てるんだろう、まあいいや放って置いっつ」

黒神めだかの代理として無理やり置いて行かれた可哀相な不知火をおもしろいので眺めていた。

『ひとよしぜんきち』（後書き）

制服に付いた血に枷は帰宅してから気付いたようです。

次回は枷が善吉とお友達になる話です。

『ともだち』（前書き）

友達は敵でも味方でもない、みたいなことを安心院さんが言っていた。ジャンプを読んで私の友達が言っていました。

榊も友達＝仲間という風には思っていないです。

『ともだち』

津奈木柳は友人、不知火半袖、人吉善吉と共に校舎の影から一人の陸上部員の様子を窺っていた。

その内の一人とはまだ友人という関係となってから1週間しか経過していなかった。

1週間前

柳は不知火と他愛のない会話をしていた。

「そういえば、人吉くんは結局生徒会に入ったんだっけ」

「あひゃひゃ 人吉の奴はなんだかんだ言ってあのお嬢様に振り回される運命なのさー!」

「おかげで退屈することは無くなったわけだ」

「まーね あ、人吉だ、おーい!」

人吉は生徒会庶務の腕章をつけていた。

「何だ不知火か、どうした?」

「あんたが探してると思って津奈木を連れてきてあげたんだよ！」

「！？、そういえば礼言つとくのすっかり忘れちゃってた。」

「お礼？」

榊は首を傾げる。

「ああ、あんた昨日俺を保健室まで運んでくれたろ？ありがとな！ホント助かった。」

人吉は屈託の無い笑みで微笑む、榊も作り笑いだが笑顔を見せる。

「・・・そんなことをしたようないような、でも、お礼を言われるのは悪い気がしないこともない」

「どっちなんだよ！ていうか津奈木って不知火の知り合いなのか？」

「津奈木はあたしの友達だよん」

「だから人吉くんとも仲良くなりたいたいと思ってたんだ。」

榊は既に無表情に戻っていたが、不知火は相変わらずニヤけている。

「俺と？まあいいぜ、よろしくな」

「じゃあこれからは人吉って呼ぶ」

こんな軽い感じのノリで友達になったのだった。

そして話は最初に戻る。

榊は友人二人と隠れていたのはいいが生徒会の仕事ということ以外全く状況が分からないので、二人の会話を聞き流しつつ何が起るのかと予想していた。

「しかしな、善吉よ。」

すると何時の間にか背後に黒神めだかが立っていた。

どうやらスパイクを切り刻んだ犯人を捜しているらしいがあの陸上部員が

犯人だという証拠は無いのだそうだ。

（直接聞くんだろうな、生徒会長さん。）と榊は思ったが口には出さない、

こういふ面白い出来事は黙って眺めているに限る。

案の定黒神は本人に犯人か否かを質問していた。

それを見てコケる人吉と転げ笑う不知火、柷はそんな友人達を余所に凄いスピードで

走り抜ける陸上部員を目で追っていた。

そしてそれを上回る速さで追いかける黒神、とてつもなく速い。

柷は黒神達を追う人吉を見送っている不知火に声をかけた。

「追いかけるのもめんどいし帰ろうかな」

「そーだね、あたしも走るのキライだし」

そしてその日は普通に帰宅した。

翌日

昨日の黒神めだかと人吉善吉の生徒会執行により、スパイク事件は無事解決した。

一人はまだ納得がいていないようだったが。

そして黒神はふと、思い付いた様に人吉に質問を投げかける。

「そういえば、昨日貴様と不知火と一緒に津奈木同級生が居たが、知り合いか？」

「ああ、あいつは不知火の友達で、俺もこないだ友達になったばかりだ。」

「不知火の友人、か。」

「しっかしクラスで見るときは津奈木ってスゲー普通な感じだったが、不知火と並んでるとなんか【同じ】ような感じがしたぜ。」

「・・・一度会って話したいものだな。」

黒神は険しい顔で呟いた。

『ともだち』（後書き）

善吉と友達になったのは生徒会執行を傍観するのに都合が良いから
です。

不知火がなぜ榊が善吉を保健室まで運んだことを知っているかは、
榊が夢だと思って話してたからです。それでピンときたようです。

次回はめだかちゃんと話します。

『くろかみめだか』（前書き）

最近お気に入り登録とか感想が増えて嬉しいです。
文才無いですが頑張りたいです。

今回はめだかちゃん視点です。

『くろかみめだか』

黒神めだかは目安箱への投書に基づき生徒会を執行していた。投書の一つである子犬探しを人吉善吉に一任し、黒神は驚異的な速さで他の投書内容に基づき生徒会を執行したのだった。ここまで速く仕事を片付けたのには理由があった。

黒神はある女生徒を探していた、その女生徒と話がしたいために、早めに用事を済ませたのだ。

探し始めてすぐ、津奈木栂は見つかった。

黒神は思った。やはり昨日見たときと「印象が全く違う」

黒神めだかは全人類を家族のように慕っているが、その中で唯一黒神に飲み込まれなかった男、「球磨川楔」そしてその負完全な存在と一緒にいる「不知火半袖」。

一見して栂は極めて普通な生徒と認識できるが、昨日黒神が栂を見かけたとき、黒神にはなぜか栂が極めて不完全な存在に見えたのだ。昨日の人吉の栂への認識の変化をみると、どうやら黒神だけでは無いようだ。

黒神はその原因を確かめるため、栂に声を掛けた。

「？、生徒会長さん、どうかしましたか？」

「津奈木同級生、突然だが貴様に一つ質問がある。」

「別に良いですよ、暇なので。」

「そうか、では問おう、貴様はなぜ不知火と友人になったのだ？」

「……そうですねー元もと不知火から話しかけてきたんですけど、強いて言うなら【同類】だったからです。」

「【同類】？私には普段、貴様と不知火が同類には見えんぞ？」

「生徒会長さんがそう思うならそれで良いですよ。」

「……随分と適当な物言いだな。」

「適当……そうですね、それがピッタリです。」

「……もう一つ質問がある。」

「良いですよ。」

「貴様には、【志す】なにかがあるか？」

「……それって、生きてる意味とか、信念とか、目標とかのことで
すか？そうだったら私は何も志してないです。」

「ならば、貴様は志しがある人間を否定するのか？」

「いいえ、否定する気はありません。でも、それが正しいとも思いません。」

「……」

険しい顔で黙ってしまった黒神に榊は語る。

「生徒会長さん、最初の質問の答えに少し補足します、単純に言う
と、貴方が私を普通と認識したならそのときの私は偽者です。貴方
が私を不知火と同類と認識したならそのときの私は本者です。」

「それならば普段の私の貴様への認識は、偽物だということになる。」

「そうですね、でもそれは貴方のせいじゃないです。私のせいです。」

「どづいづことだ？」

「それはまた分かる日が来ると思いますよ、わかりませんが・・・
もう行っても良いですか？お腹減っちゃって。」

黒神は少し考えていたがすぐに答えた。

「ああ、かまわん、長々と話してしまいすまなかった。」

「じゃあ、生徒会長さん、またお話ししましょう。」

背を向け歩き出す榊を見ながら、黒神は苦々しい表情をしていた。

率直な質問をしたにも関わらず、黒神には榊の本質というものが全
く分からなかった。

自分自身のことについて問われているのに、まるで意見を確立させ
ていない。

他人の考えについて否定も肯定もせず、意見せず、とても曖昧な存在。

だがやはりどこかアイツと「同じ」

黒神は榊についてそんなことを思っていた。

『くろかみめだか』（後書き）

榊は不完全です。球磨川くんとか不知火は負完全です。私の中ではちよっと違う感じですよ。

めだかちゃんや善吉が榊を過負荷と認識できたのは、榊が同類である不知火と一緒に居たため周囲への印象の操作を忘れていたからという設定です。

気付くと会話が多くなっちゃってますね。

次回は阿久根くんに会います。

『あくねこじつき』(前書き)

PCの調子が悪くて投稿が遅くなってしまいました。
ごめんなさい。

デリートオフデリート
零式消去は特別な身体能力も無効化します。

枷は適当なので自分の発言にも無責任っていうか忘れます。

『あくねじつぎ』

阿久根高貴は困惑していた。

その原因を作ったのは紛れもない目の前に居る一人の女生徒だった。

数十秒前、阿久根はその女生徒にぶつかった。

そしてその女生徒は普通によるけ、普通に地面に尻餅を着いた。だが、それは阿久根にとっては異常な出来事だった。

阿久根は「十一組」であり、「特別」な身体能力を持つ特待生である。

そして「柔道界のプリンス」と呼ばれている男だ。その実力を持つてすれば、女生徒とぶつかることなど無いはずだ。

阿久根自身、何の問題も無く避け、紳士的な対応をした、つもりだった。

だが現実とは異なるものだった。

実際に阿久根は女生徒にぶつかっているのだから。

しかし阿久根が困惑している理由はそれだけでは無かった。

ぶつかってしまったことを謝ろうと阿久根が女生徒の顔を覗き込むと、

目が合った。

その目に阿久根は衝撃を受けた。

「濁っているのに鏡のような光沢を放ち、こちらを向いているのに視界に阿久根を映していない」そんな目。

同じような目をした人物を阿久根は一人だけ知っていた。

阿久根が「破壊神」と呼ばれていた頃、生徒会長であり破壊の指示を出していた男。

だがなぜそんな目をした人間がこんなところに居るのか、阿久根は分からなかった。

そこまで考えると生徒徒の声がした。

「ねえ」

阿久根は生徒徒のその一言でやろうとしていたことを思い出した。

「！、すまない少し考えごとをしていたものだから」

と、手を差し伸べる。

改めて生徒徒を見ると、至って普通な印象に「見えた」。

「・・・こちらこそ、ごめんなさい。」

手を取って立ち上がり生徒徒は無表情で言った。

阿久根はいまだ拭えない疑問を質問した。

「……ところで君、一年みたいだけど何組？あと名前は？」

「?・・・一年一組津奈木です。」

「そうか、俺は二年十一組阿久根高貴、ぶつかってすまなかったね。」

そう阿久根が言うと榊はニコリと笑った、作り笑いで。

その後も阿久根が榊に抱いていた過負荷な印象が消えることは無かった。

「……阿久根先輩とはまたどこかで会いそうな気がします。」

別れ際、津奈木榊は阿久根に唐突に言った。

榊の言った通り二人は同じ日に再会するのだった。

榊は気付いていないが。

それから少し後。

榊は柔道部に居た、今日の生徒会の仕事は柔道部部長の後継者選びらしい。

面白そうだったのでついて来たのだった。

榊が生徒会執行について来ることを黒神めだかは最初警戒していたが、段々慣れてきて最近では榊がついて来るだけで見ているだけの無害な存在だと認識している。

黒神は柳に質問をした日から柳が普通という存在では無いことだけは分かっていた。

だがそれ以外は分からなかった。

人吉善吉は特に何も思っていないようだが。

しかし阿久根高貴は違った。

よりもよってなぜあの女生徒が生徒会と行動を共にしているのか不思議だった。

なので阿久根は人吉との勝負の後、黒神に答えを求めた。

「……めだかさん、あの隅の方で座ってこつちを見てる生徒って……」

「ああ、津奈木同級生か、善吉の友人でありなぜか我々の生徒会執行を眺めるのが

好きなようだ。今日もついて来ている。」

「眺めるだけ？」

「うむ、眺めているだけで何の行動も起こさぬ、目的も全く分からない。」

阿久根はいつになく真剣な表情で告げた。

「……実は今日津奈木さんと会ったとき、なぜかあの子の印象が【あの人】と同じに感じたんです。」

「!??・貴様もか、阿久根二年生、実は私もついこのあいだ同じ体験をしたのだ。」

黒神の表情も少し険しくなる。

「だが、最近は津奈木同級生にそのような印象は抱かない。
・・全く、不可思議なことだ。」

そう言っつて黒神は榊に視線を向ける、黒神達が自分について話しているとは知らず、

榊は小さく欠伸をしている。

その様子は至つて普通としか言いようがない、
いや「普通過ぎる」のかもしれない。

阿久根高貴には津奈木榊という存在が信じられなかった。

『あくねこじつき』(後書き)

相変わらず駄文ですね。もっと分かり易く書きたいんですが・・・。

あと、私と私の世界の認識操作はあくまでも

バグテコミュニケーション

「印象」をいじるだけなので過去に過負荷な人物に会ったりした人
には

「普通」という印象を認識させるのは難しかったりします。
でも出来ないことも無いです。

次回は水中運動会です。

『きかいじまもがな』（前書き）

更新遅いですね、ペース上げれるように努力します。

タイトルに反してもがなちゃんとおまり絡めてないですね。
フラスコ計画あたりでまた絡むと思います。

『きかいじまもがな』

津奈木栂はいつも通りだった。

いつものように暇を持て余し、そしていつものように少し離れたところで物事を傍観する。

そしてその様子に疑問を持つ生徒も居ないだろう、一部を除いてだが。

「津奈木栂は普通な生徒」そんな認識を持っていれば栂の本質を見出すことは出来ない、それが出来るのは栂の「同類」だけだ。

だがそれは紛れもなく栂の過負荷のせいであり他の誰にも非は無い。

もちろん栂本人が望めば「同類」以外にも栂の本質を認識することなど簡単なことだが。

そんなことは滅多にしない、本人曰く「めんどくさい」からだそう
だ。

栂はひたすらに眺める、退屈だから。

何かを学習する訳もなく、何かに熱中する訳もない、退屈で死にそうだから。

ただの退屈しのぎであり暇潰しであり、深い意味など有りはしない。

なので傍観という栂の行動に疑問を持つことは、実質何の意味も無いと言っている。

そもそも「あらゆる異常や過負荷や特別を無効化する」ということは、裏を返せば栂自身には「普通」な出来事しか起こらないという

ことでもある。

柳はその事に気づいているのかまたは無意識に、「自分には起こらない事」が頻繁に起こる

この学園に来たのかもしれない。そんな考察もできる。

・誰かが柳の過負荷に気付いていればの話だが。

そして今日も柳は見ているだけ。

ただ目の前で起こる少しばかり異常な出来事をぼんやりと眺めていた。

異常な出来事といえば生徒会だが、今回の水中運動会では何やらお金に溺れる競泳部を改心させるようだ、久し振りに黒神が上から目線で善説を述べている。

柳はいつもと同じようにそれを無表情で見物していた。

すると話し合い？が終わった後、なぜか競泳部の一人、喜界島もがながこちらに向かってきたのだ。

喜界島は柳を少し睨み気味に話しかけてきた。

「・・・あんたも、あたし達を哀れだと思ってるの？」

「？、何のことが分からない」

柳はなぜ喜界島が自分に話しかけてきたのか、そしていきなりの質問への答え、両方の意味で言った。

しかし喜界島の表情はますます厳しくなった。

「見てたんでしょ？さっきの、あんたあの生徒会長とはまた違うけど、なんで人をそんな目で見るの？」

「・・・そんな風に見えたなら謝る、ごめんなさい」

榊はいつも通り見学しているだけなので、なぜそんなことを言われるのかよく分からなかったが、別に謝らない理由も無いので素直に謝った。

「じゃあ答えてよ、あたし達の夢、札束のプール、あんたはどう思うの？」

喜界島は榊に詰め寄ったが榊は変わらず無表情で、何一つ感情が読み取れない。

「・・・わかってもらおうなんて思っていない】って、生徒会長さんに言っただけ？」

「・・・あんたを見てると、あたし達の上で無意味に思えてくる、

夢って何なのか分からなくなってくるんだ。」

喜界島は少し俯いて言った。

榊はそんな喜界島に視線を向けつつ言った。

「私にはよくわからないけれど、君達が信じていることを否定する権利なんて私にはきつとない。それに何か世の中に大切なものがあると考えるだけ、何かを手に入れば幸せになれると思うだけ、君

達は幸せな方だと思う。」

「!!!ふざけんなつ、あたし達はお金が無いせいで不幸な目に遭って来た!それなのに幸せなはずがない!」

そう喜界島が叫ぶように言うと榊は興味無さそうに返した。

「お金が無いことが不幸なんじゃなくて、お金が無いと幸せになれないと思うことが不幸なんだよ。たぶん」

「.....」

黙ってしまった喜界島を見つめながら榊は言葉を続ける。

「...私みたいな口先だけの人間が言っても説得力無いから、誰か物好きな人が証明してくれると思う、きつとそのうちに」

「それ誰かわかって言ってるでしょ?もういーよ、あたしから話しかけてあれだけど
あんた意味わかんないよ」

「別にわからなくても大丈夫」

そう榊が言うと喜界島は呆れたように競泳部の方に戻ってしまった。

「なんか展開が見えてしらけちゃったなー」

一人ぼつんと残されてしまった榊は呟いた。

その後競泳部は黒神によって無事改心させられたようだが、榊にはそんなこと関係無いので不知火と一緒にご飯を食べに行った。

『きかいじまもがな』（後書き）

榊は良いこと言ってるようで実際はそんなこと全然思ってます。あくまで適当に出まかせを言ってるだけです。

榊は基本傍観が好きなのでこういうイベントにはあまり参加しないです。

でもそれに固執してる訳じゃないです、最低限に参加しなければならぬのなら

参加します、というより巻き込まれます。

今回は風紀委員に粛清されかけます。

『おにがせはりがね』（前書き）

不知火は枷の過負荷、ゼロットオフゼロット零式消去の存在を知っています。
それが後々厄介なことになってきます。

『おにがせはりがね』

風紀委員鬼瀬針音は不機嫌だった。原因は先日のとある出来事だった。

先日鬼瀬は生徒会の役員の服装への注意をしたのだが、黒神めだかだけがその注意に従わず、それでもなんとか鬼瀬は黒神に通常の制服に着替えさせようと計画を練るが失敗。

まあ、考えが浅はかだったこともあるが鬼瀬は見事に生徒会長黒神めだかにしてやられたのだった。

しかしいつまでもそのことにかまっている訳にもいかず、今日はあゝる生徒の校則違反の現場を取り押さえることが鬼瀬の仕事だった。

そして鬼瀬はその途中で津奈木栂と出会った。

津奈木は両手に沢山の菓子パンやら惣菜パンやらを持ってどこかへ向かっているようだった。

鬼瀬はその様子に風紀の乱れを感じた為、栂に話しかけた。

「校則違反です！」

「？」

栂は驚いたような素振りをしたが、背を向けているため表情は分からなかった。

「そのあなた！その大量の食べ物はどうするつもりですか！買い食いは校則違反です！」

「・・・私、食べてないよ。これはお腹を空かせた友達の分。」

「ええ、わかっていますとも、あなたの友達というのは不知火半袖さんですね？」

「そうだよ。」

榊は変わらず鬼瀬に背を向けている。

「だとしたらあなたの行為は結論的に校則違反です。」

「なんで不知火が食べるとわかるの？」

そう榊が言つと鬼瀬の表情が厳しくなる。

「・・・あまり反抗的な態度をとると肅清に値しますよ？」

鬼瀬は武器である手錠を取り出しながら言つ。

「ふーん、肅清ってことは風紀委員さんかー」

それだけ言つと榊は突然走り出した。

「その反抗的な行動っ！肅清に値しますっ！！」

鬼瀬も追いかけてつつ手錠を振り上げる。

そして枷へ目掛けて振り下ろす。

だが少々狙いがずれてしまっていたようで鬼瀬の拳は壁に思いつ切りぶつかってしまった。

普段の鬼瀬の拳の破壊力なら壁の方が凹んでいるのだろうが、今回はなぜか違った。

鬼瀬が感じたのは「カツンッ」という音と手に走る少しの衝撃、それだけだった。

理解できない出来事に鬼瀬は一瞬呆然としたが枷を見失いそうだった。その後を追った。

津奈木枷は追われていた。

なんだか風紀委員と話すのがめんどくさくなり、とにかく不知火のもとに向かおうと、走っていた。

途中風紀委員に肅清されそうになったが枷の過負荷のせいかことごとく失敗したようだ。

そしてなんだかんだで逃げ切り、人吉善吉と歩いている不知火に会うことが出来た。

「あ、津奈木どうかした？」

「おっ、津奈木」

「不知火、はいこれあげる」

そう言うと不知火に向かって持っていたパンを投げる榎。そしてそのパンを見事にすべて口でキャッチする不知火。それを見て若干引く人吉。

追いついた鬼瀬が見たのはそんな光景だった。

「やっと追いつきました。そして不知火半袖さん！ついに現場を押しさえました！二人ともちょっと一緒にきてもらいましょ・・・」

と鬼瀬が言っている間に不知火は自分が持っていた食べ物も全て食べてしまった。

「え？何ですか？やめてくださいよ、何か証拠でもあるんですか？」

「私は買ったけど食べてないから違反じゃないよ。」

二人はきりつとした顔で言う。

「私はどちらもこの目で見ています！言い逃れは出来ません！肅清に値します！！」

そう言って鬼瀬は手錠を構える。

「ちよっ・・・鬼瀬待ってっ・・・！」

止めようとする人吉、それを見てにやりと笑う不知火。

「サンキュー人吉！」

「!?!」

すかさず不知火は人吉を鬼瀬の方に突き飛ばしたのだった。

「あひゃひゃひゃひゃ 学園警察だか手錠メリケンだか知らないけど、あんまりトンドリハネたりしないほーがオススメだよ鬼瀬!あとアンタじゃ津奈木を肅清するのは無理だと思うよ?」

意味ありげなことを言いつつ不知火は逃げる。

「人吉、頑張れ」

そしてその後には榊も続く。

「くっ・・・待ちなさいっ!」

「やめとけよ鬼瀬、不知火は適当にメシ食わしときゃそれで無害な奴だし、津奈木はほつとしても無害な奴なんだから。ある意味あいつらはめだかちゃん以上にアンタツチャブルだぜ」

「そんなわけにはいきません!それでは風紀委員会の名がすたる・・・」

そう言つて鬼瀬は立ち上がると、いつの間にか人吉と鬼瀬は手錠で繋がっていた。

その頃榊達は

「人吉うまくやったかな。」

「いまごろ鬼瀬となかよくやってるよ。」

「・・・手錠で繋がれてたりしてるかもね。」

「気付いていたようだ。」

『おにがせはりがね』（後書き）

この後鬼瀬ちゃんはまだかちゃんと榊のことを一緒に雲仙くんに報告しました。

今回は風紀委員長と対決するかもしれません。

『うんぜんみょうり ぜんぺん』(前書き)

PCが壊れそうでしたがなんとか持ちこたえてくれました。
遅くなってごめんなさい

タイトルを思いつ切り無視して

今回は榊と雲仙くんの会話はありません。

『うんぜんみょうり ぜんぺん』

とある風紀委員の会話

「 以上が鬼瀬委員からの報告です。まあ二回連続の失態とういことで、彼女には謹慎を言いつけようと考えておりますが」

部下らしき方が淡々と言う。

「いーよ別に謹慎とか、鬼瀬ちゃんがカワイソーじゃん」

それに応えたのは上司なのだろうが明らかに小学生にしか見えない。

「けどおつかしーなー、黒神はともかく、鬼瀬ちゃんが一組の一般生徒に負けるなんてな。まあそっちの奴は情報が足りてねえし、たしか津奈木とかいったか？そいつ」

続いて過負荷な二人組＋異常な十三組の会話

「あ、生徒会長さんが居るよ、不知火」

津奈木枷は横でぼきゅぼきゅと効果音を出す親友、不知火半袖に話しかけた。

「ホントだ、お嬢様ーご無沙汰してまーす！」

「生徒会長さん、久し振りです」

「……ああ、確かに久し振りだ二人共」

柳達が呼びかけると黒神は凜とした態度で答えた。

「今日はまたお似合いなファッションで！」

「鼓笛隊……ですね」

息ピッタリに言う二人。

「なに、目安箱に投書があったものでな、今日の案件は苦情処理だ。どうやら音楽室の防音設備にガタがきておるらしく、オーケストラ部の大音量に対する文句が再三再四よせられておるのだ」

「あーその話あたしも聞いてますよ、文句言いに行っても部長が言葉巧みにかわしちゃうらしいですねー」

「生徒会はどんな手を打つんですか？」

「うむ、まずは防音設備のできる限りの補強、それから稽古時間時間帯の折り合わせかな」

「ふうーん ま、お嬢様なら言いくるめられはしないでしょうね」

「でも今日は生徒会のお仲間は居ませんね」

柳はわざとらしく、といつても本人はそんなつもりは無いのだが。キョロキョロと周りを見回した。

「善吉も阿久根書記も喜界島会計もそれぞれ別の投書のために動いておる。まったく頼りになる奴らだよ。私はとても楽をさせてもらっておる」

黒神は誇らしげに言う。

「……一人生徒会じゃなくなって良かったですね」

榊は微笑みながらも無機質に言った。

何か言いたそうな黒神に不知火は質問を投げかけた。

「でもこうなると最後の一人が誰になるのか俄然興味深くなってきますねー、誰が座るんでしょうねー、副会長の席には！」

「……私としては残る一席には」

不知火と榊の目を見て黒神は真剣な顔で答えた。

「不知火、津奈木同級生、貴様らのような人間に座ってほしいと思っただけなのかな」

榊は全く表情を変えず、不知火はキャンディを噛み砕きながら言い返した。

「あひゃひゃ やめてくださいよ、知ってるでしょ？あたし組織とか集団とかムリなんです」

「生徒会長さん、誘う相手を間違っと思ってます」

榊はそれだけ言うともうこの話題に興味湧かないのか、視線を黒神から離す。

そんな榊とは対照的に、不知火は黒神を睨み気味に続ける。

「それにこれも知ってるでしょ？【あたしはあなたが嫌いだし、あなたはあたしがキライです】」

「それでよい、否、そうではなくてはならない。今のメンバーは私に對して少々【好意的過ぎる】。だからこそ生徒会執行部副会長は私の對抗勢力であるべきなのだ。私は暴君でこそあれ、独裁者になるつもりはない！」

そう言つて黒神も負けず劣らず不知火を睨み返す、その言葉に不知火は半ば呆れている様子だった。

そんな二人を榊は無表情ながらもやや楽しそうに眺めていた。

そして何気なく周りを見回すと、一人の生徒がこちらに歩いてくるのが目に留まった。

「君は、昨日の風紀委員さん、だよな」

「あ……うわっ、津奈木さん……」

榊は普通に話しかけたが鬼瀨は明らかにあたふたしている。

そして不知火と黒神も鬼瀨に気付き、鬼瀨も音楽室に用があるという事で一緒に向かうことになった。

箱庭学園第弐音楽室にて

柷はあまり普段この教室に出入りすることは無いのだが、それでもこの部屋の雰囲気の「異常」さに気付かずには居られなかった。

それは黒神達も同様だった。

オーケストラ部の部員と思われる生徒がボロボロになり、重なって気絶している様は、とても普段音楽室として使用されている教室だとは思えなかった。

そしてその光景の中心には元凶とおぼしき生徒、風紀委員長 雲仙 冥利が返り血を全身に浴び、佇んでいた。

『うんぜんみょうり ぜんぺん』(後書き)

こんな駄文でも読んで下さっている方々に申し訳ないので
これからは週一ペースの投稿を目安にしたいと思います。

あくまで目安なので遅れることもあるかもしれませんが
暇なときに見て行って下さい。

鬼瀬ちゃんは雲仙くんに枷のことを少しおおげさに報告したように
す。
捕まえられなかったのが悔しかったみたいです。

次回は雲仙くんと的直接対決です。

『うんぜんみょうり ニじゅうん』(前書き)

ほぼ一か月ぶりです。

前編を投稿してすぐPCが壊れました。
修理に出してたのが昨日返ってきました。

週一投稿とか書いてたのにこのザマです。

『つんぜんみょつり じつへん』

「おつ、鬼瀬ちゃんじゃん タオル持ってきてくれたんだ、サンキユー」

「あ、は、はいっ」

目の前の光景に動揺している鬼瀬からタオルを受け取り、風紀委員長、雲仙冥利はおおよそこの場に不釣り合いな程にのんびりとした口調で言った。

「ったくオレは本当にダメだなー、返り血まみれなんていつもの事なのに。いっつもタオル忘れちゃうんだよなー」

雲仙は受け取ったタオルでわしわしと顔を拭き、ある程度拭き終わったところで顔を上げ、黒神を睨みつけた。

「で、なに。黒神めだか？なんでテメーがここにいるわけ？」

そしてお互いに対峙する二人。

津奈木栂はこれから起こるであろう異常同士の戦いに巻き込まれぬよう、少し黒神達から

距離を置き、傍観する姿勢をとっていた。

だが、栂の予想は少し外れ、雲仙の一方的な攻撃を黒神が全て受けるという形になった。黒神が避けない理由は「攻撃される理由がな

いから避ける理由がない」からだそうだ。

榊はそんな黒神の考えが理解出来なかつたが、さして気にする様子もなく、目の前で起こる異常な出来事を観察していた。

やがて雲仙は黒神に生徒会役員達に風紀委員会から三人の刺客を放っていることを宣言した。

それを聞いた黒神はため息をつき、呆れた様子で榊と不知火に言った。

「不知火、津奈木同級生、ここは任せたぞ」

「はい？」

「？」

「今度私が手ずから満漢全席を振る舞ってやるから、頼むよ」

それだけ言つと黒神は凄まじいスピードで出口の方へ走りだした。

「あ!?!どこ行こうってんだよ黒神!お仲間を助けに行こうってか!?!今からこっから間に合うワケねーだろが!ムダな悪アガキしてんじゃねーよボケ!」

そう言つて雲仙は黒神に攻撃を浴びせるが、どうやら当たらなかつたようだ。

「チツ・・・甲賀卍谷の忍者かよ、あのバケモン女・・・」

すかさず黒神の後を追おうとする雲仙の前に榊と不知火が立ち塞が

る。

「どうする？不知火、私満漢全席なんて食べれないよ」

「うーん、お嬢様もまたメンドーなこと頼んでくれちゃったねえ。あたしだけならともかく、津奈木、アンタがいるとややこしいんだよね」

ほのぼのとしたやり取りとりをする二人に雲仙は軽く殺意を覚えたが、その会話で津奈木という名前に聞き覚えがあることに気付いた。

風紀委員長、雲仙冥利は津奈木榊という存在に内心違和感を感じていた。

「ふーん、テーマが津奈木榊か、しっかし見た感じ思ったより【普通】じゃんか」

「よく言われます」

榊はまるで興味が無いというように、虚ろな目を雲仙に向ける。

「・・・チツ、けどやっぱ納得いかねーな、テーマみたいなのを鬼瀬ちゃんが粛清し損ねるなんてな！」

そうして雲仙が榊を睨みつけると、今まで黙っていた鬼瀬が急にあたたふたしだした。

「あつ、そ、それはきつと私の調子が悪かったからです！それより委員長、黒神さんを追わなくていいんですか!？」

「いや、気が変わった、まあどうせ生徒会を潰したらコイツの情報を集めるつもりだったからな。バケモン女の悪足？きを見物する間、津奈木栂、まずテメーから先に肅清してやるよ！！」

そう宣言したかと思うと雲仙は間髪入れずに黒神に行ったのと同様の攻撃を栂にした、【つもり】だった。

そして次の瞬間雲仙が見た物は、

「・・・スーパーボール？」

雲仙の攻撃をモロに受けぼろぼろになった津奈木栂、ではなく床に転がる無数のスーパーボールをしゃがんで眺めている津奈木栂の姿だった。

「な・・・！？、避けやがったのか！？」

驚く雲仙に不知火がニヤニヤしながら説明する。

「避けた？そんなこと津奈木に出来るワケないじゃん 避けたんじやなく、【当たらなかつた】んだよ そーでしょ津奈木？」

栂が顔を上げて雲仙を見る。

「不知火説明ありがとう。良くわからないけど、そんな感じなんじやないですか？風紀委員長さん」

「そっそんな、委員長の攻撃が全部外れるなんて・・・」

「・・・ケケケ、確かに、そのエアオツパイの言う通りかもしれないな。だとしたら、イタズラにこっちの手の内を見せるのは得策じゃない、そう言いたいんだろ？」

雲仙は納得したようだが鬼瀬の方は良く分かっていないようだ。

「貴方がそう思うなら、きっとそうなんじゃない」

柷は無表情で答えたものの、それ以外には何一つ反応らしい反応を示さない。

「・・・仕方ねーな、なら津奈木柷テメーは【何者】だ？今回はこの質問に嘘偽りなく答えれば見逃してやる」

柷は考える様子もなく即答した。

「何者なんでしょうね、どっちにしる大した存在じゃないから気にする事ないですよ」

「答えになってねえよ、じゃあ選択肢をやるよ。このままオレに肅清されるか、テメー自身の正体を晒すか、二つに一つだ」

「無駄ですよー、津奈木にソクナこと言っただって、適当にはぐらかされるだけ！」

相変わらずニヤニヤしている不知火、すでにこの話に興味を無くした様子の柷に雲仙は苛立っていた。

「あん？じゃあ何か、エアオツパイ、テメーにはコイツの正体がわかってるってことか？」

「あたしにも正直よくわかんないな」。でもこれだけはわかつちゃう、津奈木はあんたやお嬢様みたいな【異常】じゃないし、かといってフツの一般生徒ってわけでもない、まあ、どっちにしる変わったヤツだよ」

「ハン！ふざけるのもイイ加減にしやがれ。だったらそいつは特別ってことか？特別ぐらいでオレの攻撃を全て【外させる】なんて芸当ができるワケねーだろ」

二人がお互いに言い合っていると、不意に雲仙の携帯が鳴った。

「ああ？任務失敗？どいつがよ！？全員！？」

会話の内容から察するに、電話の相手は雲仙の部下のようだ。

榊は興味が無いのか暇つぶしに床に散らばったスーパーボールを突っついていた。

雲仙を部下から一通り報告を受けると気分を害したのか電話を切り、素手でぶっ壊し、黒神への悪態をついたかと思うとそのまま壁を壊し、鬼瀬に風紀委員の帰宅命令の伝言を頼んだ。

「津奈木榊、テメーはまた改めてオレが直々に肅清してやる、覚悟しとけよ」

雲仙は去り際吐き捨てるように榊に言った。

『うんぜんみょうり ニじゅうへん』（後書き）

はい、とりあえず榊と雲仙くんの対決？は終わりです。
でも雲仙くんの出番は続きます。

榊は面白いことには興味がありますが、自分のことには興味が全くありません。

週一投稿とか書いといてかえって読んで下さっている人に迷惑をかけてしまいました。これからは不定期更新一筋です。

相変わらずの駄文ですが楽しんで読んでくれたら幸いです。

次回はめだかちゃんが暴れます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6217v/>

なぎなぎさん

2011年10月29日02時14分発行